

国際ブローカー婚のカップル

台湾

横田祥子 よこた さちこ / 日本学術振興会特別研究員 (東京外国語大学)、AA 研共同研究員

台湾家族事情——国際結婚の仲介業者を通じて、赤い糸を手繰り寄せた台湾人男性と東南アジアの女性。恋愛ぬき、で始まった夫婦はどのように「家族になる」のだろうか。



1980年代前半に撮られた国際ブローカー婚のカップルの結婚写真。女性は退役した身寄りのない外省人男性に紹介するためにシンカワン市より連れて来られたが、最終的にZ町の客家人のもとに嫁いだ (2010年)。



ベトナム人女性がZ町で経営する美容院 (2010年)。

「へたに結婚して苦労したくない」——恋愛も、キャリアも手に入れてきた台湾の女性たちは、結婚して母親のように姑や舅に仕えて苦労したくないという。一方で台湾の男性たちは「子がないのは親不孝の最たるもの」と相変わらず結婚を急かされている。親世代、男と女それぞれの結婚観の狭間で苦悶した男性たちは、ブローカー婚に走った。

ブローカー婚とは、婚姻仲介業者の斡旋を受け、経済発展の遅れた地域の女性が、比較的経済発展の進んだ地域の男性に嫁ぐ結婚である。台湾では1990年代以降、中国本土や東南アジア出身の女性と台湾人男性のブローカー婚が増加している。こうしたカップルは、男女とも比較的学歴、職業的地位が低い傾向がみられる。今や恋愛婚が当たり前の台湾で、即席に結ばれた二人はどのように「家族になる」のだろうか。筆者の調査地である台湾中部の客家人地区・Z町から、二組のケースを紹介したい。

客家人としての縁をたどって

二人は、2004年インドネシア・西カリマンタン州のシンカワン市で出会った。この地の華人は現在でも客家語を話す。18世紀、中国本土の客家人は新天地を求めて、台湾やインドネシアへ渡って行った。それから二世紀、すでに各々の移住先で根付いた客家人同士が、再び結婚で結ばれ

夜間中学に通うベトナム、インドネシア出身のお嫁さんたち (2005年)。



ることとなった。

「僕が独身でいることを母さんが嘆いて泣くんだよ。それで仕方なくお見合いをした。この子なら結婚してもいいかな、と思ったのがアミさ。」

アクン (44) とアミ (25) は、6年前、出会いから3日後に夫婦となった。その後、夫は台湾へ帰り、妻のビザが下りるのを待った。3ヵ月後、晴れて新妻を迎えるため、彼は中正国際空港に向かった。飛行機はとっくに着いているのに、妻はいつまでたってもロビーに姿を現さない。

「あの時はよもや逃げられたのではなかったよ。結局、仲介業者が彼女の乗る便名を間違っただけだった。彼女のほうは僕の姿が見えないものだから、仕方なく一人タクシーに乗り、家までやってきた。初めて台湾に来たというのに、勇気あると思わないか?」

アミは中学卒業後、市場で売り子をしていた。姉たちはマレーシア華人のもとに嫁ぎ、兄もマレーシアへ出稼ぎに行っている。まだ高校生の末弟だけが親元に残っている。アミの村では、女性はシンガポールやマレーシア、香港、台湾などの華人男性に嫁ぎ、男性は現地の先住民であるダヤック人と結婚するケースが多いという。結婚の経緯について、彼女も村の習わしに従っただけだと語った。

一方のアクンは高校を卒業し、兵役を終えて実家に戻ると檳榔店を始めた。両親は梨農家をしていたが、家業を継がなかった。檳榔とはヤシ科の植物で、種子と石灰をキンマの葉に包んで、噛みタバコのように用いる嗜好品であり、肉体労働に従事する男性がたしなむ習慣である。したがって彼の顧客には若い女性はおらず、農家の中年男性ばかりだ。商売に明け暮れている

台湾に多くの華人女性が嫁いでいくシンカワン市の街頭風景 (2010年)。





Z町の主要作物である梨の栽培風景（2010年）。

Z町のナイト・マーケットの様子（2007年）。



うちに、いつの間にか40に手が届こうとしていた頃、母が隣人からの情報で、インドネシアに行けば客家語ができる嫁が見つかることを知り、インドネシア行きを勧めてきた。

夫婦は日々、二人三脚で檳榔店を経営している。午前中は夫、午後には妻、夜は再び夫という具合に交代で店番をし、空き時間には檳榔園の手入れも行う。現在、二人には4歳と2歳の息子がいる。幸い、姑が上の息子の面倒を見てくれるので、アミは普段下の子だけを世話すればよい。アミは生まれも育ちもインドネシアだが、インドネシア語以外に客家語、標準中国語にも堪能で、漢字の読み書きもできる。親が中国語教育世代だったので、中国語学習を重視する気風の中で育つうちに習得したらしい。彼女の中国語能力に、姑たちは一目置いており、子供の教育についても彼女を信頼している。というのも台湾では、ブローカー婚によって生まれた子供たちの学習能力が取りざたされており、その根本に中国語の読み書き能力の問題があると考えられているためである。しかし、アミ一家は心配なさそうだ。

土曜の夜、Z町にナイト・マーケットが立つ。パチンコや輪投げ、B級グルメの店が立ち並び、田舎町に一時の娯楽を提供する。アミも下の息子チーを連れて遊びに行く。ベトナム食材の露店で調味料を買い、夫に好物の「仙草ゼリー」を買う。明日の日曜は店を開けて、一家でいちご狩りに行く予定だ。

「皆「外国人花嫁」と言うけど、アミのことそんな風に思えないよ。」と、アクの兄は言う。アミは同じ客家人として家に迎え入れられ、今ではすっかり家族の一員となっている。食卓には



アミお手製のサンバル・ソースが欠かせない。そのうち、インドネシア料理の一品が家族の味になりそうである。

子はかすがい

ジョン夫妻の「饅頭店」は、町で一番大きな市場のはずれにある。ジョン(52)は毎朝4時、前の晩に仕込んであったたねから「饅頭」を200個ほど作る。「饅頭」とは粉を練って蒸した丸いパンで、台湾ではごく一般的な朝ご飯である。8時過ぎ、妻のツイ(32)が、子供を学校に送ってから店番にやってくる。彼女はベトナム南部・アンザン省出身のキン族である。ツイは店番をしながらも、夜間中学の授業の予習に忙しい。

「もうすぐ中学を卒業するの。高校に進学したらどうと夫は勧められるけど、自分はもういいわ。次は子供たちの番ね。」

ツイはベトナムで中学を卒業後、ホーチミンへ働きに出た。工場の同僚と誘い合い、運だめしで台湾人と結婚してみようということになった。1990年代後半、ベトナムでは配給制度と結びついた戸籍制度が廃止されたことで、若年層を農村に引き留める



西カリマンタン州シンカワン市の海辺（2010年）。

足かせがなくなり、都市へ出稼ぎに行く者が増えた。折しも、台湾の結婚仲介業者が新たな斡旋源を求め、ベトナムへと進出して行った時期と重なった。台湾人にとってベトナムは、中国文化の影響を色濃く残した親近感を覚える国である。加えて、ベトナム人女性の白い肌と華奢な体格へのあこがれ、そして勤勉で労苦に耐えようだという期待から、彼女たちはたちまち台湾人男性の人気の的となった。他方、ベトナム人女性たちは、送金して実家を助けたい、都市で生活したい、もしかしたら自分を愛する王子様に出会えるかもしれないという「シンデレラ・ドリーム」を夢見た。

結婚後すぐめぐまれた双子の息子は、今年小学5年生になった。そろそろ今後の学費が心配になってきた。「饅頭」が全部売れても材料費を引くと、わずかしが手元に残らない。ジョンは収入を補うため、時々工事現場でも働いてきた。しかし、彼ももう50を過ぎ、肉体労働は体力的にも辛くなってきた。今度はジョンが店番をし、ツイが工場へ働きに出ようかと話し合っている。

「今思えば台湾に嫁いだからといっ

て、生活が楽になるわけではなかったのね。旦那を愛しているかと言われると、正直言って分からない。でも子供たちに対しては責任があるから、私は台湾に残り続けるわ。」

家族を守ろうという決意に支えられて、「饅頭店」は今日も営業する。

誠意を頼りに「家族」になっていく

片や結婚相手がいないから仕方なくブローカー婚を選んだ台湾人男性。片やよりよい生活を夢見た東南アジアの女性。ブローカー婚の夫婦は、結婚当初は「同床異夢」だったのかもしれない。(場合によっては)言葉も習慣も違う、共通の思い出もない…。偶然に結婚した相手と果たして家族になれるのだろうか、という不安が募る。しかし、容易に理解し合えない二人だからこそ、「あなたと真剣に家族になりたいのだ」という誠意だけは何とか伝えようと努めながら、日々の労働を共にし、他人同士から「かけがえない間柄」を作ってきたのではないだろうか。やがて子供というかすがいを得て、ブローカー婚の夫婦は「家族」としての結び付きを強めていくのだろう。